

には、これらをまとめて火鉢とよぶようになり、都市の町家を中心に急速に広まりました。

また、炬燵には掘り炬燵と置き炬燵があります。掘り炬燵は室町時代に囲炉裏から置き炬燵は江戸時代に火鉢から発達したといわれています。置き炬燵からは布団に入れて足を暖める行火も生まれました。さらに江戸時代には小型で携帯用の懐炉も使われるようになりました。

その後、暖房用の燃料として薪炭・石炭・コークス・ガス・炭団・豆炭・電気・石油などが使用されてきました。

現在では、家庭の暖房の中心は電気炬燵・石油ストーブなどからファンヒーター・エアコンへと移ってきました。また、化学反応を利用した使い捨て懐炉も使われるようになりました。



置き炬燵

## 炊 事

農家などでは囲炉裏と竈で煮炊きをしていました。竈は竪穴式住居の炉から炊事の役割が分かれたものと考えられています。竈は地方によってはクド・ヘツツイなどとも呼ばれました。



七輪

囲炉裏のない町家などでは七輪が使われ江戸時代から広まりました。

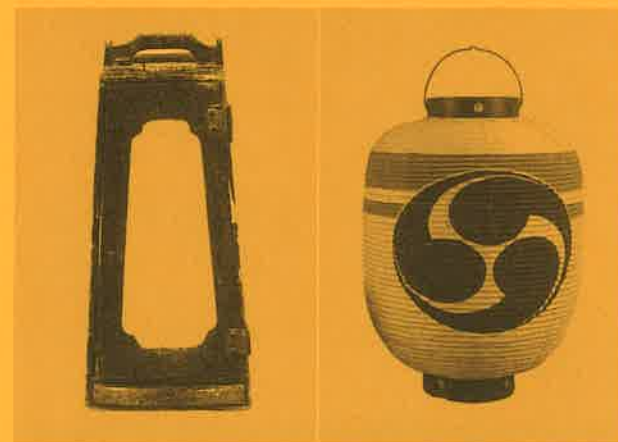
明治時代にはガス焔炉が登場しますが、大都市の一般の家庭に広まったのは大正時代の後半からでした。

電気釜の開発は大正時代からはじめられていましたが、スイッチ1つで炊きあがる自動式電気釜が登場するのは昭和30年代のことです。

## 学習の手引

### 第24号

# 火 — 今と昔 —



行灯

提灯

## 広島市郷土資料館

☎734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

TEL (082) 253-6771

FAX (082) 253-6772

## 火 と 暮 ら し

人間は昔から火をさまざまに利用し、暮らしを豊かにしてきました。

日常生活の中で使われてきた火には、**照明・暖房・炊事**という3つの主な役割があります。

竪穴式住居の炉は、住居内を明るくしたり、身体を暖めたり、物の煮炊きをするのに利用され、**照明・暖房・炊事**の役割をあわせもっていました。

農家でみられた囲炉裏も、炉から発展したものと考えられています。

しかし、しだいにそれぞれの役割が独立した器具がつくられるようになりました。

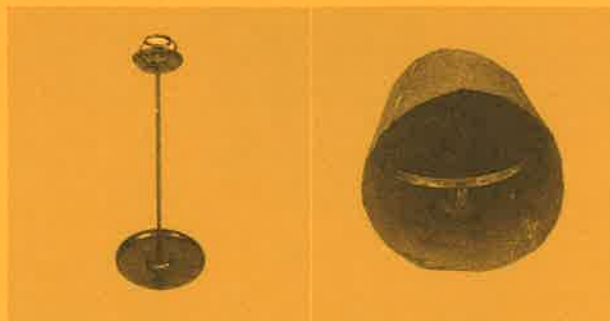


囲炉裏

府中町歴史民俗資料館にて撮影

## 照 明

古くは松明を焚いたり、ゴマ・エゴマなどの油を皿に入れて燃やすなどして明かりとしていました。奈良時代ごろから油皿をのせるために、いろいろな形の灯台が使われるようになりました。裸火は消えやすいため、灯台に紙の覆いをつけた行灯が考えだされました。



燭台

龕灯

蠟燭は奈良時代に中国から伝わっていましたが、室町時代に国内でつくられるようになり、江戸時代に急速に広まりました。これにより、灯台に蠟燭立てを取りつけた燭台が広く利用されるようになり、携帯用の提灯も発達しました。また、手に持って歩ける手燭や蠟燭立てが自由に回転する龕灯も発明されました。

提灯や手燭が広まったことにより、これまで携帯用の照明として使われてきた行灯は室内に置かれるようになりました。

明治時代になると石油ランプが広まり、ガス灯も登場しました。しかし、やがて、便利で安全な電灯が照明の中心となっていきました。蛍光灯が広まるのは戦後になってからのことです。

## 暖 房



火鉢

暖房用の燃料としては薪と木炭が長い間使われていました。囲炉裏で薪などを燃やすと煙がち、持ち運びもできないため、燠や炭火を利用し、移動のできる火鉢が発達しました。平安時代には、木製の炭櫃や火桶といわれるものが使われ、室町時代には金属製の火鉢が登場しました。江戸時代